

ダウンバースト（後編）

漆

（前略）

シチロージが祭り見物から戻った時カンベエはまだ帰艦しておらず、私室の机の上にメモがあった。

「会議室にて待て」

（会議室？カンベエ様の執務室ではなく…？）

出かける前に指示を受けたのも、わざわざ会議室に場を移してからであった。

（会話の秘密を保つ必要があると言うことだろうか？）

濡れた私服から軍服に着替える間、シチロージは何をどう報告しようか悩んでいた。与えられた任務は、完遂したとは言い難い。それどころか、端緒さえ掴めなかったのだ。

（おまけに、海に落ちて依島の若いのに拾われたなどと、口が裂けても言えないな）

わずかな残照の中、水面に浮かんだ小舟。ピチャピチャと船側を打つさざ波の音が耳に残り、それをかき分けるようにギイギイと櫓の軋む音が響いた。

（あのハナカケって奴、誰かに報告しただろうか。だとしたら、私についてどう話さるう）

会議室へ行き副長用の合い鍵で入室する。部屋の中にひとり立って上官の帰りを待っていると、小舟のせわしない揺れの記憶で、体がゆらりゆらりと揺らぐような気がした。

（…あっ、外套！脱いだまま、あいつの船に置き忘れてきてしまった！）

何という失態！

「何をしくじっただと？」

唐突に声がして、カンベエが戸口に立っていた。

「カンベエ様！」

シチロージは飛び上がって姿勢を正した。

「お帰りなさいませ！」

兵卒宜しくあらぬ方を見つめて気を付けをする。その

前をカンベエはつかつかと横切り、礼装を解きにかかった。シチロージは急いで側に寄り、脱いだ外套を受け取る。徽章や飾りモールなどをちりばめた礼装用の外套は、実戦用とは違つてずっしりと重かつた。まるで水に落ちた自分のようだと思う。

(もしあれが軍用だったら、見物客の忘れ物では済まないかも知れない)

「シチロージ」

「あ、はい…」

カンベエはどつかと机に腰掛けると、お前も座れと手を振つて促した。シチロージはまだ手に持っていたカンベエの外套を急いで衣桁に掛けると、壁際の長椅子、副長達の定位置に腰を下ろした。そして、上官が口を開くの待つた。

カンベエは言葉を探した。どこまで話すべきか。そもそも話すべき事だろうか？いや、言われた方が当惑するような密命を与えたのだ。ここは率直に語るべきだろう。

「十分に遊んできたか？」

「はい。競技場へ行ってきました。空中を飛び交う船を見るとわくわくします」

「高速艇の競走を見て来たか。あれを見ると、俺も心が躍る。出世はするものではないな」

「もし飛び入りが認められるなら、是非手を挙げたいところですよ」

「そうだな。…首尾は？」

「は…。ご期待に添えず申し訳ありません」

「そうか」

「群衆でござつた返しておりましたし、誰もが出走する船や英雄に見とれていて」

歓声や鉦や銅鑼が渾然一体となった騒音が蘇り、ハナカケの顔が闇にぼわつと浮かび上がった。

「…行きずりに、ほんの少々言葉を交わした者はおりますが」

わずかな言い淀みを、カンベエは聞き逃さなかつた。この報告の場で、シチロージはいつになく齒切れが悪

い。それは、任務の結果が思わしくないので恥じているからか。それなら珍しいことではないが、あるいは、全く別の意味での出会いがあったのかもしれない。

いずれにしても、シチロージが報告に値しないと判断したのであれば、自分の耳に入るべき出来事はなかったであろう。

「なければそれで良い。祭りというのは、まずは楽しまねばな。お前自身が心からあの場に浸っておらねば、誰の心も引きつけることはできぬ」

「仰せの通りです」

「などと言いながら、一方では今の言葉に反する指示を与えてしまったな。許せ」

予想外のカンベエの言葉にシチロージは驚きを隠せなかった。思わず立ち上がって詰め寄る。

「確かに、任務を全うすることは出来ませんでしたか

…」

この場で今こそ、カンベエ様の真の目的が何なのか聞かせて下さい！

しかし、それを口に出して言うのは越権行為になると判断し、シチロージは強いて言葉を飲み込んだ。

その真摯な視線を、カンベエは受け止めた。机に腰掛けると、若者の顔は自分より高い位置に来る。それがついと目の前に迫ってきていた。しばし見上げてから声を潜める。

「これは今のところ、部隊の司令官と実戦の指揮官のみに知らされておる事だ。つまりこの部隊では、ヒラザと俺しか知らぬ」

シチロージの背中を冷たいものが走った。口許が引き締まる。

「無論口外はいたしません」

「お前を送り出した時には、万に一つの抑えだと話したな」

「はい」

「表だった動きがあるわけではない。極秘に探り出された情報ゆえ、間違いである可能性もある」

「一体誰がそのようなことを企むのでしょうか」

「それはまだ判明しておらぬようだ。だがその時に備えて、こちらも可能な限りの手を打っておかねばならぬ」

「もしも実行に移されれば、我らは…この空域から先へ進めぬどころか、ここで潰れてしまうことすらありえます」

「あの一族にとつてもただでは済むまい。水先案内の契約を破ることなどあつてはならぬ事だからな」

（その危険を敢えて犯してでも、東方の進軍を阻みたい者がいるのか？）

「気象観測も進路判定も、無論操船も、我ら自身で出来る限りの態勢をとる。だがこの、空という場所では何が起こるか。その規模すら遙かに予想を超える時がある。全力を尽くしても及ばぬ時、ほんのわずかでも、進むべき道筋を示唆してくれる糸口を手に入れておきたい。それ故…」

（お前を行かせたのだ）

カンベエはひたと視線を向けることで、最後の言葉を

無言の内に語った。

（事態はそこまで逼迫していたのか）

シチロージは部隊の、ひいては東方の命運が予想以上に危険にさらされていることを痛感した。

（しかしカンベエ様、糸口どころか、それではまるで、藁にもすがる思いではありませんか…）

実のところ、シチロージはその藁をすら、見つけ損ねたのだった。